

のとなり、「ちゃんと伝える」ことを避け、真の人間性を少しずつ失っているのでは？

そんな現代人に対して、衝撃的な作品『愛のむきだし』（08年）に続いて園子温監督が投げかけた本作の問題提起を、しっかりと受けとめたい。

メインタイトルの登場は？

本作の舞台は園子温監督の故郷である愛知県豊川市。「豊川いなり」の横断幕がかけられた町の中心部が再三登場するのが印象的だ。

映画冒頭、タイトルが表示される前に朝食時における母親いずみ（高橋恵子）と27歳のサラリーマン史郎（AKIRA）との仲の良い語らいが描かれ、それによって父親徹二（奥田瑛二）が入院していること、今日も2人で病院に行く予定であることがわかる。さらに史郎とその恋人らしき陽子（伊藤歩）との歩きながらの語らいが描かれるが、そこでの会話は「もし俺が死んだら・・・。」というものだから少しヘン。そして史郎と陽子との会話が「ちゃんと伝えなければ」と合致したところで、メインタイトルの『ちゃんと伝える』が表示される。

なるほど、なるほど。しかし、史郎と陽子は、互いに何をちゃんと伝えたいの？

父子の生活が一変したのは、なぜ？

雑誌社に勤務しながら入院した父親を毎日1時間見舞う史郎は、今や息子の鑑みたいな存在で、父子関係は目下きわめて良好。しかし中学、高校時代の史郎と徹二の関係はそうではなく、家庭でも厳格、学校のサッカー部でも厳格だった徹二に対して史郎はかなり鬱積した気持を持っていたようだ。私だって中学、高校時代は厳格で融通が利かず時には暴力さえ振るう父親に対して嫌悪感や憎悪感まで感じていたのだから、本作にみる徹二の厳格ぶりに中学、高校時代の史郎はうんざりしていたはず。それがこんなに改善したから、入院中の徹二はもちろん、毎日そんな史郎の様子をみているいずみもビックリ。

そう考えると、史郎が突然倒れガンの告知を受けたのはもちろんショックだが、それによって父子の絆、家族の絆が強まったのだからプラスマイナス、ゼロ？

園子温監督はさらに残酷な設定を！

ガンは遺伝する病気？史郎自身がガンだと告知されるシーンを観ていると思わずそう思うほど衝撃的。毎日徹二のお見舞いに来ていた史郎が自分も時々お腹が痛むことがあると言ったことがきっかけで、たまたま徹二の主治医の検査を受け、その結果史郎のガン罹患が判明したわけだが、父親と息子が2人ともガン告知されるケースってどれくらいあるの？プレスシートには、その点についても十分リサーチし、そういう例を多数知っ

たことが書かれているが、そりゃ相当の悲劇。もっとも、本作はそんな悲劇を描くことが目的ではなく、「ちゃんと伝える」ことが目的だから、史郎が徹二以上に深刻なガンに罹患していることは、「ちゃんと伝える」というテーマをより明確にするための脚本文上のテクニク。

前半は、親孝行息子史郎と頑固な父親徹二、そしてそれを繋ぐ母親いずみと史郎の恋人陽子を中心として比較的軽いノリで進行していくが、史郎がガン告知を受けその悩みを一人で背負い始めたところから物語は俄然重くなってくる。「ちゃんと伝える」ための基本は、真実を語ること。しかしいくらそうだとすると、史郎は徹二や陽子にそんな真実を簡単に伝えられる？

そこで史郎が徹二に願ったのは「オヤジ、先に逝ってくれ」だったが、結婚を待ち望んでいる陽子に対して、史郎は一体その事実をどのようにしてちゃんと伝えればいいのか？字幕の前に登場していた史郎と陽子の語らいのシーンは、なるほど、そういう重たい意味だったのか……。

セミの脱け殻は何を暗示？

本作はサッカー部の鬼コーチだった徹二が部員たちを怒鳴りつけるシーンの他は静かな口調のセリフが淡々と語られながら物語が進行していくから、前半から中盤にかけては、少し退屈を感じるかもしれない。そして、その中に再三登場するのが、徹二自慢の優勝カップなどとともに保管されている1本の釣り竿。これは徹二が回復し、元気になったら釣りに行きたいと思って購入したもので、本作の父と子の語らいのメインテーマになるものだが、その先につけられている小さなセミの脱け殻は一体ナニ？史郎と陽子との語らいの中にもこのセミの脱け殻が登場するが、その意味については史郎も何も語らない。映画は中盤、「今日はえらく調子がいい」と言っていた徹二の容態が急変し、あっけなく死亡してしまうところから大きく転調していくが、さてセミの脱け殻が暗示するものは？それは、すべての物語が終った後付録のように展開される短いストーリーの中で明らかにされるから、本作を鑑賞するについてはくれぐれも最後まで集中力を切らさないように。

2009(平成21)年7月1日記

弁護士 坂和章平



MYEIN
LAW DE!
SHOW

93

「ちゃんと伝える」

(今日からなんばパークスシネマほかで公開)



©2009「ちゃんと伝える」製作委員会

何と向き合うの？ 何を伝えるの？

3日から4日間実施された裁判員裁判第1号に国民の注目が集まった。そこで見えてきたのは「ちゃんと伝える」ことの難しさ。裁判ではそれが有罪・無罪の判定と量刑に大きく影響するが、園子温監督が本作で訴えたのは父と子、男と女の間にそれだ。

27歳の史郎は厳格な父親(奥田瑛二)にすっ

と鬱屈した感情を抱いていたが、徹二がガンで入院した途端素直な対話を開始。これには母(高橋恵子)も大喜びだ。2人の話題は釣り。学校ではサッカーの鬼コーチ(家

とは? そんな父子の姿は目下理想形。他方、結婚間近の陽子(伊藤歩)に対する「もし俺が父さんみたいにガンで死ぬとしても一緒に」の言葉はかなりヘン。

では厳格な家長だった徹二が購入した1本の釣り竿と、「元氣になったら湖に連れて行ってくれ。2人で行きたいんだ」との言葉に込められた思い

史郎には何か重大な秘密が? 近いうちにちゃんと伝える約束をしたが、さてその実現は?

再登場し、セリフの中でタイトルが語られる時、その問題提起の重さに気づくはずだ。

演出上大切な小道具はセミの抜け殻。これは一体何を象徴? その種明かしはラストに持ち越しされるから、集中力を失われない。心の繋がりが求められる混沌としたところ、こんなテーマを大切に

近時、婚カツがはやるのは率直に「好きだ」と伝

えられない若者増殖のためだが、主治医から自身のガン告知を受けた史郎がそれをちゃんと伝えるのは至難のワザ。「オヤジ、俺より先に逝ってくれ」との心の叫びにも納得だ。そんな若者の苦悩をEXILEのAKIRAが瑞々しく演じている。「変態で何が悪い!これが愛なんだ」と世間をアツと言わせた『愛のむきだし』(08年)とは異質のトーンだが、演出の見事さは全く同じ。冒頭のテート場面が後半

えられない若者増殖のためだが、主治医から自身のガン告知を受けた史郎がそれをちゃんと伝えるのは至難のワザ。「オヤジ、俺より先に逝ってくれ」との心の叫びにも納得だ。そんな若者の苦悩をEXILEのAKIRAが瑞々しく演じている。「変態で何が悪い!これが愛なんだ」と世間をアツと言わせた『愛のむきだし』(08年)とは異質のトーンだが、演出の見事さは全く同じ。冒頭のテート場面が後半

大阪日日新聞 2009(平成21)年8月22日